

「私」をつくるもの

宮城県仙台市立鶴谷中学校

三年 木村 琴音

生まれてすぐに一つの病気が見つかった。「心室中隔欠損症」。右心室と左心室の間を隔てる壁に穴が開いている病気だ。小さかった私に自覚はなく、生後十カ月で受けたという手術の記憶もない。一定程度の割合で出現するといわれる病気だ。自然治癒する例もあるらしいが、私は二度の手術を受けた。二度目は六歳の時だった。小さいながらに、楽しいことではないことをぼんやりと感じていたように思う。手術は二回とも成功し、今、私はとても元気に生活している。勉強は苦手だけれど、明るく前向きな性格は気に入っているし、たくさんの友達と過ごす学校生活も楽しい。くよくよしないで笑っていられる毎日は、神様が私にくれたご褒美だと思ってる。

しかし、そう思えるようになるまでには、苦しいことがたくさんあった。小学生になった私は、友達と同じように体育の授業に参加できなかった。激しい運動をすることを医師から止められていたからだ。休み時間も、校庭で鬼ごっこをする友達がうらやましくてしかなかった。教室の窓から外を見ているか、絵を描いて過ごすか、休み時間は私にとつつまらない時間だった。どうして私だけ体育がで

きないのか、どうして私だけ皆と同じように走れないのか、どうして私だけ、どうして……、と思うことばかりだった。

ある日、私のイライラは限界に達した。

「何で皆と同じように走ってはいけないの？」

「いつになったらこの手術の痕は消えるの？ 恥ずかしい、もう嫌だ！」

母に向かって叫んだことを、私は覚えてる。

「走れなくても、毎日学校に行けるでしょう。それだけでも幸せじゃないの？」

と母は言った。学校に行けなくらい、私の状態は悪かった、ということだと思った。だから我慢しなければいけないのだ。ずっと、ずっと我慢しなければ。沈み込んでしまった私に母はさらに言った。

「手術の痕は消えないよ。それは琴音にしか無いものだから、琴音の誇りだよ。みんなに無いものを持つてると素敵じゃない。」

手術の痕を誇りに思うとは、どういう意味なのだろう。「誇り」。辞書をめくってみた。そこには「自慢できること」と書いてあった。確かにこれは、他の誰にもないもの、私にしかないものだ。しかし、これが自慢できるようなことなんてあるのだろうか、とスツキリしない気持ちだった。どうして、でも、どうして、を繰り返しながら、私は中学生になった。

中学生になるにあたって、一番楽しみなことは部活動だ。それは私も同じだった。運動部に入る、と決めていた。反対されるだろうと思っていたが、母は真剣に相談のつてくれた。とはいえ、やはり、できないことはできないし、やってはいけない範囲の運動があることには変わりはない。それでもやりたかった。私が選んだのはバスケットボールだった。コートの中を駆け回る競技で、相手チームの選手と

の激しい接触もある競技だ。試合に出られるわけではない。練習でさえ、他の部員と一緒にできないメニューもあった。それでも構わなかった。毎日学校へ行って、部活までできる。私にできることをやればいいのだ。その代わり、チームの仲間のためにできることは、最後まで頑張った。

その日もいつもと変わらない一日になるはずだった。私の部活のやり方を見て何かが変だと思ったのだろう。一人のクラスメイトが言った。

「お前、試合出られないの？ 下手なの？」

（ああ、そうか。）と思った。知らない人には、下手だからできないメニューがあり、下手だから試合に出してもらえない、そう見えるのだ。がっかりしたり、悲しくなったりすると思っただが、自分でも意外な言葉が出てきた。

「下手じゃないよ。お医者さんに止められてるだけ。」そう言った私は笑っていた。昔の私なら、なんて答えていただろうか。後ろ向きな言葉しか思いつかない。でも、今の私は違う。あの日、母が言ってくれた言葉の本当の意味はたぶんこれだ。周囲の人にとってなふうにも思われていても、私は、私にできることを頑張っていることを知っている。それどころか、私の病気を理解してくれている部活の仲間も、私を必要としてくれてるのだ。これが「誇り」ということだろう。だから私は笑って言えたのだ。その日は私にとって特別な日になった。自分を正面から受け止めることができた日。

これからも、新しい環境に踏み出すたびに同じようなことが起きるだろう。理解されたりされなかったり。けれども、私は何を言われても気にしない。今日も明日もこれから先ずっと、私にしかないものを誇りに思いながら生きていくのだから。

作文を書くに当たって

私は小学校低学年まで、人と話すことが苦手でした。心臓病の為、外で遊べなかったり、皆と一緒にできることが少なかったからです。しかし、母からの温かいアドバイスや、心臓が以前より安定したことで、友達とも一緒に遊べるようになり、とても社会的になりました。これまでの思いを伝えたいと考えて、今回思い切って作文に表現しました。